良寛詩集系統序論（上）

――自筆稿本『草堂詩集』について――

下田祐輔

はじめに　良寛詩集諸本の概要

今日までに刊行された良寛詩集の諸書に見る、良寛漢詩のテキスト（本文）は極めて多様である。例えば、「備貧」と題される詩の第一句「家在荒村繞壁立」の下三字を、あるいは「栽壁立」に作り、あるいは「半無壁」に作り、あるいは「空四壁」に作る、というが如くである。[1] これらは皆、誤伝ではない。良寛自身がこうした多様なテキストを残しているのである。

このような良寛詩集の底本として用いられているのが、良寛自筆の詩集稿本、または他筆の写本によって流布している詩集である。

自筆本は、流布本系の写本に比べれば、その存在が広く知られるようになったのは新しい。『草堂詩集』・『草堂集（貫華）』・興善寺本『草堂集』[2]・『小楷詩巻』等数本が現存する。各々の稿本の収録作品の多くは相互に共通するが、それらの作品の字句は稿本によってかなりの異同がある。

一方、他筆の写本により伝存する詩集は、早くから良寛漢詩の主要なテキストとして通行している。この流布本系の詩集は良寛自筆の詩集稿本をそのまま筆写したものではなく、自筆稿本をもとにして良寛以外の人の手によって編まれた詩集である。いずれも開版には至らないまま、写本によって流布していった。現存する写本は、鈴木嘉校『草堂集』と、『草庵集』の名で知られる詩集との二系統に大別される。両者の所収作品の大部分は共通し、そのテキストも大差はない。だが詩篇の排列の仕方は全く異なる。なお、これら流布本系の写本は、現存のどの自筆稿本とも字句の完全な一致を見ない。従って流布本系の詩集の底本として用いられたはずの自筆稿本は、現存のどの自筆稿本とも別のものであると推測されるが、それに当たる稿本の所在は今日なお不明である。

さて、現存自筆稿本には何れも、良寛自身の筆によって字句の改変の書き込みが施されていて、良寛が稿本を作るごとに繰り返し推敲を行った様子が知られる。この推敲の経過を辿ることにより、良寛がその詩に目指していたものを窺い知ることが可能になろう。ところが、これら自筆稿本はいずれも、執筆時期や執筆の事情に関する記述を全く欠いている。そのため現状では、流布本系を含め、どの本文を以て定稿あるいは最終稿とすべきかすら明確ではなく、各稿本の成立時期・成立順序も曖昧なままとなっているのである。

良寛詩集の諸本の位置づけについての総合的な考察は、管見に入

る限り、『良寛全集』（昭和三十四年）に於ける東郷豊治氏の論が唯一のものである。氏は自筆本『草堂集　貫華』、及び写本『草庵集』・写本『草堂集』（鈴木本）について、収録詩数、詩篇の排列、字句の異同等を検討した上で、次のように位置づけられた。即ち、『貫華』は初期の未定稿本である。それに良寛が推敲を施した〝新稿本〟（所在未詳）を何者かが借受け、筆写したのが『草庵集』である。その後良寛がさらに推敲を重ねた〝新々稿本〟（所在未詳）をもとに、『草堂集』（鈴木本）が作られた。そしてその新々稿本が定稿本である。以上が、東郷氏説の要旨である。しかしながら、その後新たに自筆稿本『草堂詩集』等の伝本の存在が知られるに従って、東郷氏説は不備を来しており、再検討が急務となっている。

諸本間で異なるテキストを、推敲の観点から位置づけようとする試みもある。[3] テキスト間の相異なる表現を比較検討し、作品の仕上がり具合によってテキストの成立順序を推定するという方法である。こうした考察はなお部分的な試みに留まっており、良寛の詩作の全容を包括する統一的な研究の推進が要請されるところである。しかしながら作品の読みに出発するこの方法では、ともすれば既存の、或いは論者の主観のもとに設定された評価基準に基づいて、作品の評価が下されがちである。それが良寛自身の持つ価値基準に合致しているという保証は得られていない。実際このような方法によってこれまでに導き出された結果は、必ずしも単一ではないのである。

そもそも、自作品に関しての言及をほとんど残していない良寛の、作品に対する価値意識を（とりわけ個々の表現に即して）正確に理解することは容易ではない。彼は当時の漢詩壇から離れて自由な立場で詩作を行っていた模様であるが、その営みは、「孰謂我詩々　我詩非是詩　知我詩非詩　始可与言詩」（『草堂詩集』天巻）等の詩に窺われる如く、彼独自の価値意識に支えられてのものであったと思われる。そこで、それを正しく見極めることが必要であるものの、テキストの成立順序が不明確なままでは、それを精密に考究することは不可能であると思われる。

従って、まず、作品の読み以外の手がかりを可能な限り求め、テキストの成立順序を解明することが不可欠である。本稿ではテキスト間の字句の相異・一致といった、極めて外面的な要素の検討から出発したい。

ここではまず、良寛自筆詩集稿本の中ではいまやその存在が最も重視されているにも関わらず、その位置づけが曖昧なままとなっている『草堂詩集』を中心に検討する。

一　『草堂詩集』の構成

『草堂詩集』は〝天・地・人の三巻から成る良寛自筆の詩集稿本〟として知られる。各巻とも、推敲に際しての書き込みがおびただしく施されており、草稿というべき存在であるものの、現存の自筆稿本の中では、質・量ともに最も充実したものと目されるため、最近では、良寛漢詩評釈の底本として、従来の流布本系テキストに代わって取り上げられることも多い。

ところで、本詩集には、かなり多くの詩篇の重出があるとされており、しかも、その各々の間には、字句の異同が存する。この重複詩篇の扱い方については統一されていないのが現状である。[4] それは、本書が三巻から成るとする見方に原因があると思われるのであ

るが、この点には大きな疑問が存する。以下、考察する。

『草堂詩集』の原本は、新潟県西蒲原郡分水町地蔵堂、本田家蔵。『墨美』二一〇・二一三号（昭和四十六年）所収の写真図版によりその全容を知ることが出来る。次に各巻の概要を示す。

	紙数	巻頭題	所収作品の形式	作品数
天巻	一九枚	「雑詩」	五言　雑詩（無題詩）	一〇六〔一一一〕
地巻	一五枚	なし	五言・七言　有題詩	六六〔六八〕*1
人巻	一〇枚 *2	「雑詩五十首」	五言　雑詩（無題詩）	五三〔五三〕

*1　〔　〕内は、『墨美』二一〇・二一三号の〈訓釈〉に於ける作品通し番号に基づく作品数。この作品番号は、天から人まで三巻通しの番号であり、また詩集本文中の行間等に小字で書き込まれた作品を含めている。右に記したのはこの書き込みの作品を除いた作品数である。尚、以下に用いる作品番号はしばらく今日通行する『墨美』のものに従うが、天・地・人の巻の別を併せ記すこととする。

*2　最後の第五十三首は、最終丁ウラの最後の行まで書かれているものの、未完のまま紙幅が尽きている。人巻には、このあとに更に少なくとも一丁が存したのではないかと疑われる。

右の如く、所収作品の形式は、それぞれの巻毎に統一されている。このことは、本集が編成されるに際し、詩集としての体裁がある程度留意されていたことを示しているかに思われる。ところが、天巻と人巻とは、ともに「雑詩」の集である点で共通するばかりでなく、四十八首もの作品を両巻に〝重複〟して収録する。しかも、それら重複する作品の全てについて、少なくとも一・二字、多いものでは作品全体にわたって、字句の異同が存するのである。

このような関係にある、天と人との二つの巻が、当初から一つの詩集を構成するものとして計画的に併せて作られたものかは、大いに疑問としなければなるまい。しかるに、これらは「草堂詩集」の題のもとに、一連の巻名を付与せられ、一つの詩集であるものの如く扱われているのである。(5) 従来この点に関する疑問があまり取沙汰されないのは、あるいは、本集はいわば手控え的な草稿に過ぎない、という見方にもよるのであろう。(6) 確かに本集は草稿には違いない。だが、その構成や書き込み等を細かく見てゆくと、本集は無計画に綴った単なる手控えではなく、収録作品の取捨を施し、体裁の整った自撰詩集を作るための草稿であった、と考えられるのである。（このことについては、別稿にて改めて論じることとしたい。）

そもそも、この詩集名と巻名は何によるものであるかといえば、まず、「草堂詩集」なる題は、良寛自筆の原表紙に書かれていることから、良寛自身がつけたものであることが知られる。ただし、その原表紙は、三巻のうちの天巻にのみ付されている。(7) 表紙とはいえ、左肩に「草堂詩集」と墨書されているほかに、その余白には漢詩が三首、見返しには和歌が七首、細かい字でびっしり書きつけられており、草稿本体の延長の如きものとも言える。この原表紙には、巻名はなんら記されていない。

巻名が記されているのは、各巻に後装された外表紙である。それらには洋画家、中村不折氏の筆で、「草堂詩集　天（地・人）」と記されている。題は原表紙に拠ったことが明らかであるが、巻名は

表一

作品番号	冒頭句	詩句数	改変字数				
人		人	人				
天		天	天				
180	我有一張琴	28	0				
1		26	0				
181	痛哉三界客	14	0				
2			3				
182	自参曹溪道	8	5				
3			2				
185	昨日出城市	8	2				
4			0				
192	負薪下西岑	4	2				
5			9				
190	宅辺有苦竹	12	0				
6			5				
191	青山前与後	4	0				
7			1				
184	千峰一草堂	8	0				
8			2				
193	寂々春已暮	8	9				
9			2				
197	我有拄杖子	8	2				
10			4				
194	人生一百年	10	0				
11			0				
195	吾師来東土	8	0				
12			5				
183	中年拠筆硯	14	14				
14			12				
198	東風吹時雨	人14	10				
17		天16	1				
200	陽春二三月	人6	1				
19		天10	17				
199	尋思少年日	8	1				
21			5				
215	宇内有其人	8	3				
23			0				
203	金羈游俠子	8	15				
27			1				
214	心水何澄々	8	0				
28			2				
221	昨日之所是	12	1				
30			1				
208	家有猫与鼠	12	1				
31			3				
205	憶在円通時	12	4				
32			4				
196	大哉解脱服	8	5				
35			2				
206	手把鬼角杖	4	1				
37			0				

1																							
2																							
3																							
4																							
1																							
2																							
3																							
4																							
1																							
2																							
3																							
4																							

a

b

c

d

計	217	228	231	213	232	220	219	218	212	211	226	225	224	223	210	188	201	227	209	222	230	229	207	202
	84	79	77	71	70	69	68	67	66	65	62	61	60	59	58	56	54	52	51	46	45	40	39	38
	文殊乘獅子	柳娘二八歳	生涯懶立身	我見世間人	青陽二月初	誰家不喫飯	誰家不喫飯	誰家不喫飯	過去已過去	古仏留教法	孟冬是十月	肅々天気清	今年非去年	嗟俗之孤薄	永夜草庵裏	清晨且独行	窮谷有佳人	伊昔東家女	余郷有一女	我見行脚僧	富貴非我事	珊瑚生南海	時上無畳閣	冥目千嶂夕
	4	8	8	12	人10天22	8	8	8	12	16	10	人8天6	8	8	8	人14天12	4	人12天10	12	人14天12	人8天10	14	人10天8	8
212	4	2	2	0	0	1	0	0	9	4	10	0	0	8	3	7	0	11	0	14	0	3	39	19
200	0	0	0	10	2	3	0	0	4	3	0	0	0	1	9	0	0	2	1	4	2	6	38	19
92	2	1				1			6	2	3				1	1		3		10			26	10
0																								
1																								
29									1					5				2		2		2	4	4
44															3				1	2	1	4	4	6
10															1									4
3																								
12															2									
44						2			1									1		1		1	10	
3																								
1															1									
0																								
18	1										1									2				
0																								
0																								
9											3												2	

＊ 表中の作品の排列は天巻の排列順序に従い、冒頭句は天巻所収テキストに拠った。

＊ 詩句数は各巻に於ける推敲前のもの。推敲によって増減したものもあるが、ここでは示さない。

何によるものか、定かでない。推察するに、これら三冊の稿本がひとまとめにして伝えられていたことより、後世、この三冊は一連のものと判断され、三巻ともども「草堂詩集」の題によって括られ、「天・地・人」の巻名が与えられたのではあるまいか。しかしながら、この処置が、果して良寛の詩集編成の意向に沿ったものであるか、疑問である。少なくとも、所収詩篇の大部分が重複する天巻と人巻とは、元来『草堂詩集』をともども構成するものではあるまい。むしろ、同じ雑詩の集の一草稿本（初稿ではない）とその再稿本である、と考えたほうが妥当であるように思われる。

そこでつぎに両巻執筆時期の先後関係について検討する。

二　天巻と人巻との先後関係

雑詩の集である天巻と人巻とには、いずれも全体に亙って推敲の書き込みがなされている。この書き込み字句を手がかりとして、両巻の先後関係を知ることは出来ないだろうか。例えば、二つの草稿本、甲稿、乙稿にともに収録される詩篇について、甲稿に施された推敲の結果が、乙稿の本行字句[8]に一致するとき、〈まず甲稿が書かれ、それに推敲が施されたのち、乙稿が書かれた〉と判断されよう。これを天巻と人巻とに当て嵌めれば、[9]まず、次の如き箇所が見出だされる。（矢印は見かけの改案の方向を表す。引用箇所は通行の字体に依り、抹消符号が[10]施されている字には右傍線を付した。踊字には相当する字を当てた。以下同じ。）

a　人巻テキストの書き込み字句と、天巻テキストの本行字句とが一致する。

（例）　人193　寂寂春已莫　↓　天9　寂寂春已暮

右の例の字句を辿ると、まず人巻で推敲が行われ、次にそれに基づいて天巻が書かれたように見受けられる。

次に、甲稿では字句の改変が行われていなくても、乙稿にて改変が行われている箇所について、甲稿の字句が乙稿の改変前の本行字句と一致するならば、〈甲稿が作られた後、乙稿が書かれ、そこで初めて字句の改変が行われた〉と見ることが出来る。即ち、次のような場合である。

b　人巻テキストの本行字句（改変されない）と、天巻テキストの本行字句（改変前）とが一致する。

（例）　人199　尋思少年時　↓　天21　尋思少年時[日]

右の例の場合、人巻が作成され推敲が施された時点では、右の箇所での字句の改変はなされなかったが、続いて天巻が作成され更に推敲が進められた際、初めて改変が行われたかの如くである。この場合、天巻が人巻より先に書かれたと見ることは自然ではなかろう。

ところが、天巻と人巻との間には、これとは全く逆の様相を呈する箇所もまた認められるのである。つぎに挙げるc・dはそれぞれa・bと逆の事象である。

c　天巻テキストの書き込み字句と、人巻テキストの本行字句とが一致する。

（例）　人221　得失難預期　↑　天30　得失難預知[期]

この場合、天巻が先に書かれ、改変が施されたのち、人巻が書かれたかの如く見える。

d　天巻テキストの本行字句（改案されない）と、人巻テキストの本行字句（改変前）とが一致する。

（例）　人203　結客少年場[五陵東]　↑　天27　結客少年場

この場合も、天巻の方が先に書かれ、それをもとに人巻が書かれた後、人巻に於いて初めて改変が行われたかの如く見える。

このように、aとc、bとdという、相反する事象が、天巻と人巻との間に並存していることは、書き込み字句を手がかりとして両巻の先後関係を判断することを困難にするかのようである。だが、実際には、どちらかが先に書かれたことは間違いない。相反する事象が並存するとしてもその数には何らかの差異があるはずである。いま、天巻と人巻とを見渡したところの印象を言うならば、cやdに該当する事象よりも、aやbに該当する事象のほうがより頻繁に目につくように思われる。そこで、この点をもう少し細かく検討すべく、天巻と人巻とに共通して収録する四十八首の全てについて、a～dの各項目に該当する事象を、一字を単位として、数量測定を行ってみた。(11) その結果、得られたのが表一（四・五頁に掲げた）である。以下、表一に従って考察を進める。

まず全体的に見て、a及びbの各パターンに該当する事象数が、c及びdのそれに該当する事象数を大幅に上回っている。全作品について見れば、a・bの合計値とc・dの合計値とを比較すると、およそ8対3の比率で前者の数値の高さが顕著である。

次に、作品毎には各事象の状況がどうであるかを見てみよう。表二にその概略をまとめてみた。作品番号は天巻のものである。

次に掲げる二首は、どちらも①に該当する作品である。そのうち「寥寥春已莫」詩は全体に亙ってaの事象が認められ、「尋思少年時」詩は全体的にbの事象が認められる。それぞれに、人巻のテキストが推敲された後、天巻のテキストが書かれ、更に推敲が加えられた、といった過程を、かなり明瞭に字句の上に辿ることが出来る。

表二

①aまたはbの事象数がcまたはdの事象数を上回る作品
（太字はc及びdの事象数が0である作品）
3・**4**・**5**・**6**・9・12・14・**17**・**21**・**28**・32・35・**38**・39・40・**45**・46・**51**・52・**56**・58・**59**・**65**・66・**79**・84　二六首

②a・bの事象数とc・dの事象数が同数の作品
8・30　二首

③cまたはdの事象数がaまたはbの事象数を上回る作品
（太字はa及びbの事象数が0である作品）
1・**7**・19・**23**・27・**31**・62・69　八首

④a・b・c・dの事象数が全て0である作品(12)
11・37・54・60・61・67・68・70・71・77　一〇首

⑤a～dのいずれかの事象は存するが、天巻・人巻の先後関係が判断出来ない作品(13)
2・10　二首

人 193

寂寂
寥寥春已莫
寥寥独
寂寂長閉門
参天藤竹冥
没階薬草繁
体霞 挂壁
筆硯長委埃
香爐更無烟

天 9

寂寂春已暮
寥寥独閉門
参天藤竹暗
没路蓬蒿繁
体 空囊永掛壁
香 寒爐更無烟

	蕭灑物外境		蕭灑物外境
	終宵啼杜鵑		徹夜啼杜鵑
人199	尋思少年時	天21	尋思少年時（日）
	遊遊逐繁華		不知有吁嗟
	好著嫩鵞衫		好著嫩（黄）鵞衫
	能騎白鼻騧		能騎白鼻騧
	朝過新豊市		朝買（沽）新豊酒
	莫醉河陽花		莽看河（世陵）陽花
	帰来知何処		帰来知何処
	笑指（直）莫愁家		直指莫愁家

①に該当する、即ち字句の上では人巻から天巻への改案の方向が読み取れる作品は四十八首中二十六首を占める。それに対して③に該当する、天巻から人巻への改案の方向が字句の上で読み取れる作品は八首、①の三割に過ぎない。この点からも、天巻が人巻の再稿本である可能性が高いことが窺える。

ただ、そうではあっても、①の作品のなかには、右のように推定される先後関係に矛盾するはずのcやdの事象を示す箇所を若干含むものがあり（例えば右の「寥寥春已莫」詩の第六句はcに該当する）、③の作品の如く、そうした事象がaやbの事象数を上回るものさえ存在することは、なお疑問として残る。

次に掲げる「金羈游俠子」詩は、その③に分類される作品であり、字句改変箇所の大部分がdのパターンを示す、顕著な例である。

人203	金羈游俠子	天27	金羈游俠子
	志気何揚揚（擡容）		志気何揚揚（抑）
	維馬垂楊下		維馬垂楊下
	結客少年場（五陵東）		結客少年場
	一朝千金尽		一朝千金尽
	轗軻誰復傷（零落如飛蓬）		轗軻孰復傷
	帰来問旧里		帰来問旧里
	歳寒四壁荒（妻子亦不容）		歳寒四壁荒

右の詩のみを眺めると、先にみた方向とは逆の、天巻から人巻への改案の流れを読み取ることも可能である。けれども実際に両方の先後関係が並存することは無論あり得ないわけであり、③に該当の作品は、見かけ上天巻が人巻に先立つと思われるに過ぎないということになる。この場合、実際には、一度記した人巻の改案に、何らかの不都合な、また意に満たぬ点が見出だされたため、続く天巻では旧案に復された、と解釈されることになろう。ただ、推敲の途上で、このような逆戻りの改案がどの程度頻繁に行われたかが問題である。

このことに関して、一稿本上での字句の改変に伴う、抹消符号の付し方が一つの示唆を与えると思われる。

天1　風（郎師鑑道）伯（風）掃・路　　＊「道」は「路」の直前の脱字を補入すべく書き加えられた字である。
　　雨（風）師蔽林叢

字句改変箇所においては、元の案である本行字句に抹消符号が付

され、改案である書き込み字句が選び取られているのが通常である。ところが、右の対句においては、書き込み字句の方が抹消されている。ここでは、対語である「風伯」と「雨師」とを入れ換えるべく、ひとたび改案を書き込んだが、なお検討するうちに、やはり旧案の方が良い、ということになったものと推察される。このように一旦書き込んだ改案の方を抹消し、もとの案を残すという措置が、人巻、天巻それぞれにおいてどの程度行われているかを検すると、両巻ともに、少数ながら散在することが判明する。[14] 良寛の漢詩はまさに、行きつ戻りつしながら表現が練り上げられていったわけである。

右の点を、稿本間の問題に敷衍すれば、甲稿本に推敲を施したのち、更に乙稿本を新たに作成する、といった段階でも、先に甲稿本で一旦改めた字句を、元の案に戻すということはまま起こったであろう。それが、人巻・天巻間に於ける、a／c、b／dという如き相反する事象の並存として表れている、と解される。だが、こうした字句の改案の逆行は、各巻内での改案の逆行の事象の少なさを勘案すれば、極めて頻繁に行われたとは思われない。a・bの事象数に比してc・dの事象数が少なく、そして①に該当の作品に比べて③に該当の作品が希少であることは、そのことを物語るものと考えられる。以上から、やはり天巻が人巻の再稿本である可能性が高いというべきであろう。ただ、各稿本内での字句の改案の逆行に比べれば、人巻推敲後、天巻起稿の際のそれはやや頻度が高いように見受けられる。この点についての理由は未だ詳かでなく、更に考究を要するところである。[15]

なお、②④⑤は、ここでは両巻の先後関係を判断する材料となし得ない。

三　地巻の位置

さて、次に問題なのは、ともに雑詩の集である天巻・人巻と、有題の詩の集である地巻とが、如何なる関わりを以て作られたのかということである。

まず「草堂詩集」なる題は天巻に付された原表紙にあることから、天巻は少なくとも『草堂詩集』を構成する巻の一つである。これは雑詩のみの集であるから、有題詩の集である地巻と併せて『草堂詩集』となすことが意図されていたと考えられる。

このことについて注意すべき事象がある。天巻と地巻との間には、五首の重複がある（天巻所収詩には題がなく、地巻所収詩には題が付けられている）。ところがこれらの詩篇には、次に示す如く、天巻或いは地巻の必ず何れか一方に、詩篇の削除を指示する墨線が引かれているのである。

天巻		冒頭句		地巻
13		天気稍和調	×	113
16		依稀藤羅月	×	126
×（25）		苦径花如霰		
×	57	落髪為僧伽	160	141
89		佛説十二部	×	130

・数字は作品番号、×印は削除の墨線が施されていることを表す。
・（　）は挿入された作品。

天巻と地巻とで「草堂詩集」という一つの詩集を構成するのであれば、両巻の間に重複する詩篇が存することは不都合である。そこでこうした処置がなされたものと推察される。このことは天巻と地巻とが、少なくともその推敲の段階に於いては、一組のものとして

扱われていたことを示していよう。

従って良寛が『草堂詩集』と名付けた自撰詩集は、推敲が施された上での最終形態としては、天巻と地巻とをあわせた、二巻からなる詩集である、というべきであろう。

地巻の作成着手の時期については、原本に直接あたっての書誌的な調査・検討をなし得ていないため、人巻や天巻との関わりに於いてそれを特定することが、現段階では難しい。ちなみに、人巻と地巻との間には、重複する作品がひとつもないことから、地巻は天巻の作成とあわせて起稿されたのではなく、むしろ、それ以前に人巻とひと組のものとすべく作成が着手されたものであったか、とも疑われる。この点に関しては更に課題としたい。

いずれにせよ、人巻に大幅な増補と推敲とを施した天巻が作られるに至って、地巻は天巻と組み合わされ、『草堂詩集』として編成されたのである。なお、このことについては、『草堂詩集』とそのあとに作られた自撰詩集の構成を比較することからの裏付けも可能と考えるが、詳しい考察は別稿に譲りたい。

おわりに

良寛詩集諸本の系統を探る端緒として、本稿では『草堂詩集』の各巻の関係について、作品の読み以外の観点から聊かの検討を行った。現時点では一つの蓋然性を提示したに過ぎず、今後さらに様々な角度からの検証を要することは言うまでもない。当然作品の表現内容からの裏付けもなされるべきである。ただ、作品の読みを成立順序の手がかりとすることは、良寛の詩に於いてはとりわけ慎重に行わねばならないと考える。最初の段階として、今回作品内部に立ち入るのを殊更避けたのはそのためである。暫くは読み以外の手がかりを能う限り模索し、良寛詩集諸本の成立過程の解明を進めてゆきたい。続稿では『草堂詩集』とその他の諸本との関係、及び各々の成立時期について考察する予定である。

註

(1) 「纔壁立」に作る…西郡久吾『北越偉人沙門良寛全傳』(大正三年)・東郷豊治『良寛全集』(昭和三十四年)など。
「裁壁立」に作る…渡辺秀英『良寛詩集』(昭和四十九年)・入矢義高『日本の禅語録　二十　良寛』(昭和五十三年)など。
「空四壁」に作る…蔵雲編『良寛道人遺稿』(慶応三年序)・小林二郎編『僧良寛詩集』(明治二十五年)・大島花束『良寛全集』(昭和四年)・星野清蔵『良寛の詩境』(昭和十六年)・須佐晋長『良寛詩註解』(昭和二十八年)など。
「半無壁」に作る…飯田利行『良寛詩集譯』(昭和四十四年)など。
ちなみに興善寺本『草堂集』及び『草堂詩集』地巻は「裁壁立」、鈴木本『草堂集』は「纔壁立」、いわゆる『草庵集』は「空四壁」に作るほか、良寛の遺墨に「半無壁」(上原兼一氏蔵扇面)、「全無壁」(北方文化博物館蔵六曲一双屏風)、「□(脱)四壁」(高橋卯一郎氏蔵扇面)に作るものがある。

(2) 興善寺本『草堂集』は明治四十三年頃、興善寺の蔵するところではなくなり、その後分解され散々になった。分解される直前に山岸瘦石によって筆写された写本のみが現存している。

蒲原宏「良寛の漢詩研究補遺――興善寺本『草堂集』について――」（『越佐の歴史と文化〈宮栄二先生古稀記念集〉』昭和六十年）参照。

（3）渡辺秀英『良寛詩集』（昭和四十九年）、朝倉尚「良寛の詩歌寸見」（『越佐研究』第三十八号　昭和五十二年）等に、本格的な論及がなされている。

（4）例えば、前出の渡辺秀英『良寛詩集』と入矢義高『良寛』は、いずれも『草堂詩集』を底本としているが、天巻と人巻との間で重複する詩篇について、いずれのテキストを採用するかという点で、両書は方針を異にしている。

（5）従来〝草堂詩集〟の収録作品数は、天巻百十一首、地巻六十八首、人巻五十三首、それに自筆表紙書込みの三首を合計して「全二百三十五首」とされるのが一般である。だが、この作品数の見方は必ずしも妥当ではない。

（6）例えば、大場南北『良寛つれづれ』（昭和五十年）に「これらの諸点を考え合わせると、この草堂詩集という自筆の詩稿は、最初から意図的に作成されたものではなく、甚だ非計画的な存在だということである。」（一四三頁）と述べられている。

（7）天巻の本体とこの原表紙とで、虫損の跡が符合することからそれが知られる。

（8）本行字句とは、稿本が作成されるに当たって、まず書かれる本文の字句をさす。推敲の際、行間に小字にて書き込まれる字句（書き込み字句と呼ぶ）と区別するためにこの語を用いる。

（9）これは、人巻と天巻とが、一稿本とその再稿本という形で連続して作成されたものであることを一応の前提としている。このことについての確証は必ずしも得られてはいないが、次の点はその蓋然性をいくらかは支持するものと考えられる。（一）両巻の書写のありようは極めてよく似ており、各々の執筆時期が遠く隔たっているようには思われない。（二）人巻に於いて塗抹・削除されている作品は、概ね天巻には収録されていない。

（10）字句の改変の際、点・圏点・弧線・棒線などを用いた見せ消ちがなされている。これらの印を総称して抹消符号と呼ぶことにする。

（11）ここで留意すべきは、抹消符号の付し方についてである。字句の改変に際しての抹消符号の用法には、基本的には、次の四通りが認められる。

1　本行字句にのみ抹消符号を付す。
2　書き込み字句にのみ抹消符号を付す。
3　本行字句・書き込み字句の両方に抹消符号を付す。
4　本行字句・書き込み字句のいずれにも抹消符号を付さない。

1・2の場合、推敲の結果、どの字句を選んだかということが明らかである。ところが3・4の場合は、それが必ずしも明確でない。3については、まず、本行、書き込みのどちらか一方の字句を選択して他方の字句を抹消したものの、改めて見直してみると、一旦は消し去った字句の方がやはり良い、ということになり、もう一方の字句にも抹消符号が付さ

れた、といった事情が考えられる。しかしながら、どちらに先に抹消符号が付されたか、を知ることは殆ど不可能である。

このことを先のａｂｃｄの項目に即して見ると、ａ～ｄの各項目は、字句改変箇所に於ける抹消符号の用法が１の場合であるとき、何ら問題なく先後関係の判断要素となり得る。ところがａおよびｃでは、２の場合に、またｂおよびｄでは、２３４の場合に、見かけ上の先後関係の判断がつけにくい。例を挙げるとすれば、次の如くである。

ｃ２　人200　飄飄為雪飛　　天19　満城踏為泥（為字飛）

ｂ２　人180　雨師蔽林叢　　天１　雨師蔽林叢（風伯）

ｄ３　人195　直上嵩峯頂　　天12　直上嵩峯頂（熊耳）

ｂ４　人190　冷冷数千干　　天６　冷冷数千干（皓皓）

そこでａｂｃｄの各項目の事象数を調べるに際して、１２３４の場合ごとに数え、先後関係の考察にあたっては、右のような不確定要素を差し引いて行うこととした。

なお、人巻・天巻それぞれに於ける全ての字句改変箇所について、抹消符号の用法を１２３４のケース別に検し、その数と全体に占める割合とを示したのが次の表である。両巻とも概ね、１のケースが主であって、２３４は少ない。そのため、表一に見られるように、ａ・ｃにおける２、及びｂ・ｄおける２３４の、全事象数に占める割合も小さくなる。そこで考察にあたっては、これらの不確定要素を除いても大きな支障はないと考えられる。

	人巻		天巻	
全字数 / 改変	ア	イ	ア	イ
	212	248	200	621
1	140 (66.0)	164 (66.1)	141 (70.5)	426 (68.6)
2	2 (0.9)	2 (0.8)	26 (13.0)	32 (5.2)
3	2 (0.9)	4 (1.6)	3 (1.5)	26 (4.2)
4	68 (32.1)	78 (31.5)	30 (15.0)	137 (22.1)

＊ア　人巻・天巻に共通して収録する四十八首について

イ　人巻、或は天巻の全収録作品について

表中の数字は一字を単位とした事象数。但し（　）内は全事象数に対する割合（％）。

(12)　ここに該当する作品は、次のようなものである。（一）天巻・人巻のいずれのテキストにも全く字句改変の書き込みがなされていない。（二）何らかの書き込みがなされているものの、ａ～ｄの何れのパターンにも該当しない。つまり、次の如く、改変箇所における両テキストの字句が全く一致を見ない。

人213　聞道宜洗耳　　天71　我見世見人（人心各不同）

(13)　この二首に見られるｃまたはｄの事象は、全て注(11)に述べた不確定要素に相当する。

(14)　注(11)を参照。本行字句を残し、書き込み字句を抹消する、

つまり2のケースは、人巻全体では全改変字数の0.8%、天巻全体では5.2%である。

(15) 但し、作品によってcの事象が目立つもののなかには、次のようなケースも含まれている。

人183 竊慕出世人（竺土仙）　天14 竊慕竺土仙（出世人／義祖風）

人207 雲烟千萬重（喬松何落落）　天39 雲烟千萬層（長松何落落）

（清風萬古傳）寶塔映日懸　（寶塔映日懸）清風萬古傳

天14では人巻の改案と同じ案がまず書かれているが、「義祖風」、更に「出世人」と改められている。そしてこれは人183での元の案と同じである。そのため、見かけ上はどちらが先に書かれたのか判然とせず、従ってこの箇所はaのパターンに該当すると同時にcにも該当することになる。次の人207―天39の場合も同様である。いずれも結論としては、人巻から天巻へ推敲が進められたとみることで、問題ないであろう。

補注　「テキスト」は、本文批評と訳されるところのtextcriticのtextである。即ちテキスト＝本文である。個々の詩篇についての字句の異なる本文のそれぞれを指す。依拠すべき最善の本文を有する本、定本、の意味ではない。

付記　本稿を成すにあたり、米谷巌先生に終始懇切な御指導を賜った。記して篤くお礼申し上げます。

――広島大学大学院博士課程後期在学――